Web版
一本道
第３号
通巻第７３号

【本誓寺講演録】

令和六年十月二十五日　報恩講より

「一瞬（ひとときき）、一息（ひといき）、一声（ひとこえ）の称名念仏」（第二回）

金沢教区三上組　浄土寺住職　大窪康充　先生

私のお寺の所在地は山島地区と言います。市役所の職員さんが言われたのですが、この地域は農地保全地域に指定され、宅地造成ができないためか、人口減少率が高いと言われました。そのためか、当寺のご門徒ですが、仏壇じまい、墓じまいが後を絶ちません。ただ、仏壇じまいをする時に私が必ず申し添えることがあります。「お内仏のご本尊だけは引き継いでください」と。それが、絵像の場合もあるし、木像の場合もあるのですが、要は阿弥陀仏のご本尊です。いろんなご事情があるにしても、ご本尊だけは、何とか引き継いでほしい、それが仏壇じまいをする当主の責任なのだと思います。

地元の家を離れ都会に移住するあるご門徒でしたが、私は次のように言いました。あなた自身が手を合わすところを失うことは、自分を見失うことになるのです。そして何よりも、家の中の、家族の中の柱、中軸を失うことであり、あなたの家族の方々が路頭に迷いバラバラになるということです。本当にあなたが子どもや孫のことを想うのでしたら、これからの新天地においても、「ご本尊を大事にしなさい」を大事にする人生を最後まで送ってください。あなた自身が、言葉で言い表せなくても、きちんとした理由を言えなくても、人として、本当に尊いものに出あうために、決して見失ってはいけないものがあるのだ、ということをあなたが手を合わすことを通して伝えてほしいと。

本誓寺さんもそうですが、これからお寺を維持することは大変です。ただ、お寺、すなわち聞法道場がなければ、本当に尊いものが伝わらなかったと思います。そしてお寺がなくなることは、本当に尊いものが見失われていくということです。ただ、お寺は、維持するためにあるのではありません。尊いご本尊、尊い教えを伝えるためにお寺という聞法道場が必要なのだと思います。

本当に尊いもの、いわゆるご本尊である南無阿弥陀仏がどうして大事なのでしょうか。もう少し具体的に言いますと、南無阿弥陀仏の名号を意訳すれば、「帰命無量寿如来」「南無不可思議光」です。すなわち南無阿弥陀仏の名号に手を合わすとは、過去無量から未来永劫へとつながっている無量なるいのち、そ

して思いはかることができない光に帰依（南無）することです。それは、人間の知恵をこえる大きなはたらきを敬うことであると同時に、いつも正義・正論をかかげて生きている自らの慢心、おごりに気づかせてくださるはたらきです。みんなが平等に敬うところがなければ、請う身になるところがなければ、誰もが慢心やおごりによって暴走してしまう。争いが絶えないのです。夫婦喧嘩しかり、親子喧嘩もしかり、近所同士のいざこざもしかり。一楽真先生という方は、「南無阿弥陀仏は戦争を止められる。なぜなら、自らの誤りに気づかされるはたらきがあるからだ」というようなことを仰いました。自分を振り返り、立ち止まり、顧みる、そして素直に自分の非を認めるところがあるということは、相手を尊重し敬い、他人と新たに出あい続けるということだと思います。そのような意味からも、皆さん方におかれましては、最後の一大事として、ご本尊に手を合わす念仏を大切にしてください。念仏を声に出して称えることによって伝えていってください。

アップル社の共同創始者のお一人、スティーブ・ジョブズという方がおられます。13年程前に亡くなられたのですが、資産は2兆2000億円と言われています。彼の最後の言葉に次のようなものがあります。「私が勝ち得た富は、私が死ぬ時に一緒にもっていけるものではない。私があの世に持っていけるものは、愛情にあふれた思い出だけだ。これこそが本当の豊かさであり、あなたとずっと一緒にいてくれるもの、あなたに力を与えてくれるもの、あなたの道を照らしてくれるものだ。」

彼はおそらくクリスチャンかと思うのですが（注）、私自身、この言葉が、なぜか念仏を称えることと重なってきたのです。私が生きている間はもちろん、亡くなった後も、ご縁のある人々とともに生きてきた思い出が念仏の声となって残っていき、その声とともに後の人々と一緒に居て、時には生きる力を与え、歩むべき道を照らしていくことになるのだと。

皆さんが亡くなって納棺されるとき、住職が故人の法名と、南無阿弥陀仏の名号を書き添えたものを胸元におきます。荼毘にふされお骨になっても、その名号とともに、亡き人の生きた証、生き様が後世の人々に伝わっていくのです。自分が亡くなった後も後の人々を照らし導いていく「後生の一大事」、まさしく念仏を称えることが「後生の一大事」となればこそ、今現在の生活を大切にしてほしいと思うのです。

（注）スティーブ・ジョブズ氏は仏教（曹洞宗）の信徒です。

昨年もお聞きしたかと思いますが、皆さんの宝ものとは何ですか？「これだ！」と言い切れるものがありますか？ある方は、命であるとか、健康であるとか、家族であるとか……、もちろんどれも大事ですね。だけど必ず娑婆の縁が尽きる身、浄土へ還る身としてはどうだろうか？仏教で言われる宝とは、仏宝、法宝、僧宝の三つです。仏教の伝統的な帰依処として、仏、法、

僧の三つの宝ものが伝わってきたのです。

先ず「仏」とは、一言で言えば、この私を目覚めさせてくれるはたらきです。目覚めるということは、私たちはいつも眠っているということですね。それは、実際にグーグー寝ているということではありません。いつも自分の思い込みの中だけで生きている、周りの支えがあって生きている、にもかかわらず何でも当たり前と思って過ごしていることです。そして自分の正論・正義を握りしめて、自らを問い質すことなく、何でも決めつけてしまっていることを、仏教では眠っていると言うのです。そんな眠っている状態から、目覚めさせてくださるはたらきを仏さんと言います。

次に「法」とは、教え、言葉です。皆さんは今までどんな言葉に出あってきましたか、どんな教えに出あってきましたか。出あえた教えや言葉をいただくことは、本当に自分の人生を豊かにしてくれると思います。どこまでも他人に教えるのではなく、他人から教えられる立場なのだと。その教えや言葉をもとに、自分の法名を名告ることができれば、これほど尊いことはないと思います。

最後に「僧」とは、僧伽（サンガ）と言われ、人と出あい、共感する仲間のことです。もっと掘り下げて言えば、人と生まれたが故の深い悲しみを通して、本当の友に出あうということです。

そして親鸞聖人は、この仏・法・僧の三つの宝が一つとなって、一声の名号・南無阿弥陀仏の中に納まっていると言われます。

「仏」のはたらきによる尊い目覚めは、自分の思い込みが破られることであれば、それは同時に、教えや言葉が入ってくる（「法」）、そしてまた他者の声が聞こえてくる、お互いに共感していく世界が生まれるのです（「僧」）。

「法」という教えに出あうということは、本当の自分を言い当てられるということです。時には挫折や屈辱を覚えたりすることもあるかと思います。しかし、その苦悩は同時に、尊い目覚めがあり（「仏」）、他人のこころの痛みを感じとっていけると言うことです（「僧」）。

「僧」という他人と共感できるということは、教え、言葉が響いたり（「法」）、思いがけない新たな世界に目覚めていくことです（「仏」）。

そういう仏・法・僧の三つの宝ものが、南無阿弥陀仏の名号となり、その名号が一瞬、一息、一声の呼び声となって、この私に届けられているのです。だから一人ひとりが目覚めるのも一瞬、教えや言葉の響きをいただくのも一瞬、そして人と共感するのも一瞬です。いつも一瞬一瞬、一息一息、一声一声を生きているのです。

ところが私たちの日常は、その名号、南無阿弥陀仏を忘れて、どうしても「我」という〝私が〟が先に立ってしまうことがないでしょうか。〝私が〟という想いが南無阿弥陀仏の名号を覆

い隠してしまう日常生活となってしまうのだと思います。

三宝に帰依すると言っても、〝私が〟仏さんに手を合わす、私の思いで帰依するということであれば、それは仏さんを願いごとの対象にしてしまうことになりませんか。私が仏さんに帰依するという延長上では、「病気が治りますように」、「お金が入りますように」等々、単なるお願いごとになってしまう。私が仏さんに願うのではなく、どこまでも仏さんからこの私が願われているということです。

〝私が〟法という教えや言葉に帰依します。すると、「これは、いい教えだな」という自己評価になってしまい、教えを利用してしまうことになりかねません。本来、私自身に向けられた教えを、「いいこと聞いた、これうちの嫁さんに教えてやろう」、「よし！　この教えをあの憎たらしい奴に言ってやらなければ」と、こんな話になってしまうことがあります。他でもないこの私自身が教えられるということです。

〝私が〟僧伽の仲間に帰依します。すると、私はこの人は好きだけど、あの人は嫌いという、結局、私の分別による好き嫌いの話になってしまいます。私中心の気の合うもの同士、仲間意識をもつことによって逆に仲間外れを作ったり、大事な人を排除してしまい、結局は敵と味方との関係から、対立してしまうことになりかねません。

この〝私が〟が先だって仏・法・僧の三宝に帰依する、そして信じたとしても、それはバラバラになって一つになってこない。だけども本来はそうじゃない。親鸞聖人は南無阿弥陀仏の名号一つの中に仏があり、法があり、そして僧が納まっていると仰っているのです。

何度も紹介しますが、もう亡くなられた近所のおばあちゃんのお話です。お参りに行くたびに、愚痴をこぼしていました。身体が弱って生きることがしんどかったのでしょうか。「住職さん、早くお迎えに来てほしい」と言うのです。すると私が、「だからおばあちゃん、何遍も言うけど、早くお迎えに来てほしかったら、いつも飲んでいる薬をやめればいいやん」。そしたらそのおばあちゃん、「ほんなわけにはいかん」と言うのです。しまいには健康サプリメントまで飲んでいるのですよ。そしてね、おばあちゃんがニヤニヤしながら、「住職さん、やっぱりピンピンコロリで逝きたいわ、誰にも迷惑かけんと」。またお決まりの文句で私が、「本当か？　本当にピンピンコロリか？　ほんなら今日はどうや？」と聞くと、「いや、今日は困るわ」と言うのです。早くお迎えに来てほしい、でも今日は困る。そんな矛盾をかかえながら日々を過ごしている。でもそのおばあちゃん、苦労されてきた人です。やっぱり念仏を唱えてきたのですね。「ハッ！」と気づくのです。「ああ、また言うてしもた。ここまで長生きさせてもらったのに、これまでお世話になってきたのに、またもったいないことを言うてしもたわと、笑いながらの南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。そうやって、南

無阿弥陀仏に帰っていくのです。本来の私に戻っていける世界があるのです。

第三回に続きます。

講師紹介　大窪（おおくぼ）　康充（こうじゅう）

昭和四十年石川県白山市（旧松任市）生まれ。金沢教区第三上組浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院前指導主任。著書に『念仏の音が聞こえるとき『正信偈』『歎異抄』との対話』（法藏館）、『念仏の声が宝となるとき 生活にいきる『教行信証』のことば』（法藏館）、『合利佛の物語 阿弥陀経の黙った主役』（京都月出版）など。